

せき込む男性 掲げる手書きの字

ほぼ毎日、地下鉄に乗って図書館などに通っている。つい表題の朝日新聞 25 日朝刊、田玉恵美・論説委員の「多事奏論」を抜粋して紹介したくなった。

駅のホームから地下鉄の車内に足を踏み入れて、思わず眉間にしわを寄せてしまった。かなり派手に咳をしている人がいる。その隣があいていたが、私はそこを避けて向かい側の少し離れた席に座った。発車後も激しい咳が続く。立っている乗客の間から、その音が聞こえてくるほうを見ると、手書きの文字が目にとまった。「咳が頻繁に出て迷惑をおかけします アスベスト被害者です コロナではありません うつりません」

男性がひざの上にのせたかばんに、そう記した紙をくくりつけていた。胸には名札もつけている。はっきり見えないが、名前や住所が書いてあるようだった。

その人は次の駅で降りていった。申し訳ないような思いがいつまでも残った。なぜ、どんな気持ちでそのような説明書きを持ち歩いているのか聞いてみたい。男性が降りたのは霞ヶ関だった。中央省庁に用事があったのではないかと見当をつけて捜すと、その人が見つかった。

都心から電車とバスを乗り継いで 1 時間半。東京の郊外・武蔵村山市の自宅で、吉田重男さん(74)が迎えてくれた。説明書きと名札を改めて見せてもらう。「びまん性胸膜肥厚」と病名が書いてあった。

中学を卒業して以来、吉田さんは故郷の長野県や都内で左官職人として 50 年働いた。役所や学校、ホテルなどの建設現場でコテを使って壁を塗る仕事だ。塗りつけるモルタルは、セメントや水などを混ぜて職人が現場で自ら作る。その際、ひび割れなどを防ぐため一緒に混ぜた粉状の建材にアスベストが含まれていた。その危険性をメーカーや国から知らされたことはない。マスクもせず長年、粉じんを吸い続けた。

発病まで 15～50 年と長いのがアスベスト疾患の特徴だ。ともに左官だった 2 人の兄がアスベスト由来の肺がんなどで相次いで亡くなるのと前後して 2009 年、吉田さんの肺にも影が見つかる。しだいに咳が出始め、肺活量は半分以下に。階段や上り坂はとりわけつらく、8 種類の薬が手放せない。国はすでに責任を認めて謝罪したが、メーカーは責任の有無をなお争っていて裁判が続く。私が遭遇したのは、原告として東京高裁へ向かう途中だったそうだ。

コロナ禍になって以来、吉田さんはこれまでに 10 回ほど、電車の中で乗客から「次の駅で降りろ」と言われた。そこまでしない人からも「なにしろにらまれるし、みんなさーっと逃げていくね」。自分のことを理解してもらうのが大事だと考え、名札と説明書きを用意しているのだという。

冷たい乗客たちはあの日の私だ。吉田さんは公害による疾患やメーカーと闘うだけでなく、病を世間に説明し続けなければならない。それを強いていたのも私だった

(2023 年 2 月 5 日)